

※ 字数制限がある問題は、「、」「や」「。」「も」一字と数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

セイヨウタンポポのタネは、落下した場所で、季節を問わずに発芽します。ですから、道端や空き地、家の庭や花壇、国道の中央分離帯、畑の畦や野原など、土がある場所ならどこにでも、一年中、セイヨウタンポポは芽生えます。

「なぜ、セイヨウタンポポは、どんどん株の数を増やすのか」との「ふしぎ」がもたれます。また、「近年、都会で見られるタンポポは、ほとんどがセイヨウタンポポになっている」という現象が不思議がられます。

これらの「ふしぎ」や現象のうらには、タンポポのタネを生産する能力と、「いつでもどこでも発芽する」というタネの芽生える力が隠されているのです。

① セイヨウタンポポがどんどん繁殖していくのには、タネをつくる方法にも、驚くような「ひみつ」が隠されているのです。（中略）

野原や路傍で、春の太陽の明るさに映えて咲くタンポポの花は、いかにも春にふさわしい黄金色です。ですから、この植物の花は春を象徴する代名詞のように使われ、タンポポは俳句や連歌で春の季語です。しかし、注意深く観察すると、セイヨウタンポポの花が咲くのは春とは限りません。ほぼ一年中、花は咲いています。

夏や秋にも、春に比べれば個数は減りますが、花は咲いています。冬には、気温が低いために開花するのはまれですが、ツボミはあります。ツボミには、今にも開きそうに見える黄金色の花びらがあります。セイヨウタンポポでは、季節を問わずにツボミができ、タネがつくられるのです。

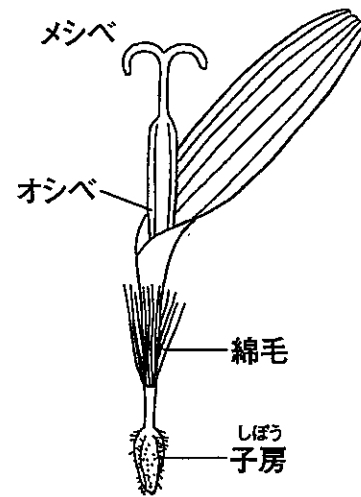
ふつうは、花のメシベに花粉がつき、受粉のあとに受精が成立して、タネができます。ところが、セイヨウタンポポでは、「花が咲くと、ハチやチョウが花粉をつけなくても、タネができる」といわれます。

③「ほんとうに花粉がつかなくても、タネができるのか」との「ふしぎ」が感じられます。もしこれがほんとうなら、タンポポでは、受粉や受精をしなくても、タネができるということになります。

実は、セイヨウタンポポは、この方法でタネをつくることができます。これが、セイヨウタンポポがどんな場所にでも、どんどん繁殖することの「ひみつ」なのです。もし、数日以内に花が開きそうに大きく成長しているセイヨウタンポポのツボミを見つけたら、試してほしい実験があります。

ハサミで、ツボミの上半分をばっさり切ってしまうのです。半分ではなく、かなり下のほうで切り落としても、この実験は成功します。この植物のツボミには、約二〇〇個の開花前の花がたてにびっしりと詰まっています。

花が開くとたくさんある花びらのように見える一枚一枚が、実は一つずつの花なのです。ですから、まだ黄金色の花びらが外に伸びだしていないツボミでも、切ってみると、中に黄金色の花びらが詰まっているのです。



ツボミのときの綿毛と
タネのできる部位

それらの上半分からメシベが伸びだしますが、その部分を切り落とすのです。そのため、花粉を受け取るはずのメシベの先端がなくなってしまうです。

はずです。

Ⅱ、てんこうにもよりませんが、約一〇日間が過ぎると、ツボミの上半分をハサミでばっさり切り取ってしまったものにも、綿毛

が開いてきます。切り取っていないツボミと同じように、球状の綿毛が展開してくるのです。

上半分を切り落としたために、ピンポン玉のような大きな球状の綿毛にはならないように思われます。しかし、球状になるときには、綿毛とタネの間が伸びてくるので、大きさもほとんど変わりません。

球状の綿毛の形成には、ツボミの上半分を切り落としたことは関係がないのです。球状の綿毛になる部分は、ツボミのときにメシベの下の方にあります。それよりさらに下に、タネが形成される部分があります。

そして、綿毛が球状に展開する前には、綿毛になる部分とタネになる部分の間にある柄が伸びるのです。ですから、ツボミのときに、上半分を切り落としたことは、球状の綿毛の形成には影響しないのです。

Ⅲ、驚くことに、その短い綿毛の基部には、なにこともなかったかのように、きちんと果実がついています。上半分を切り取っていない花の場合と同じように、果実ができています。果実の中には、タネが入っています。

メシベの先端は切り取られたのですが、「他の花の花粉がメシベの切り口について、タネができたのではないか」とも考えられます。そこで、ツボミの上半分を切り取ってすぐに、そのツボミに袋をかけます。こうすれば、他の花から花粉が飛んできて、メシベの切り口についてタネができるという可能性はなくなります。

こうしておいても、やっぱり約一〇日間が経つと、きちんと綿毛が展開し、タネができてきます。セイヨウタンポポは、メシベに花粉がつかなくても、タネをつくるという「ふしぎ」な能力をもっているのです。このようにしてできたタネは、発芽する能力をもっています。

虫に花粉を運んでもらわなくても、また、自分の花粉をつけることがなくても、タネができるのです。このように、メシベだけでタネがつけられる生殖方法は、「単為生殖」といわれます。

こうして、セイヨウタンポポは、一年中、ものすごい繁殖力で増え続けます。それに対し、日本に古くから生きてきたカン

サイタンポポやカントウタンポポなどの在来種には、単為生殖の能力はありません。

しかも、在来種には、自分の花粉を自分のメシベにつけても、タネができないという「自家不和合性」という性質があります。そのため、在来種のタネができるには、まわりに仲間がいて、ハチやチョウが他の株から花粉を運んでくれないとなりません。

もしまわりに仲間がいないと、タネはできないのです。そのため、在来種のタンポポは、田舎の畑の畦や山のふもと、野原などに、群れになって生きています。そのような土地に、家が建ち、道ができて、群生地が荒らされると、もう一度、在来種が生息地をつくることはむずかしいのです。セイヨウタンポポなら、一粒のタネが飛んでくれば、その場所で芽生え、花を咲かせ、タネをつくりまわります。

しかし、在来種は、一人ではタネをつくれず、もしできたとしても、球状の綿毛の中にできる個数は、セイヨウタンポポの約二〇〇個に対し、ずっと少なく、半数くらいです。しかも、在来種のタネは、秋まで発芽せず、花が咲くのも春に限られています。

このようにセイヨウタンポポと日本の在来種には、生殖の方法や、つくるタネの個数、そのタネの発芽する能力などに、大きな違いがあります。そのため、セイヨウタンポポが都会でどんどん株の数を増やし、在来種は、昔から生育している郊外に、細々と、ひっそりとくらしているのです。

その結果、セイヨウタンポポが在来種を都会から追い出したような印象をもたれているのです。日本古来の在来種を守るために、私たちは、土地の開発に慎重にならなければなりません。

(田中修『植物のひみつ』一部改)

【注】 1 畦……田と田との間に土を盛り上げて、境としたもの。

2 路傍……道のほとり。みちばた。

3 連歌……二人以上の人が、和歌の、上の句(五・七・五)と下の句(七・七)とを互いによりみ合って続けていく形式の歌。

問一——部①「セイヨウタンポポがどんどん繁殖していくのには、タネをつくる方法にも、驚くような「ひみつ」が隠されているのです。」とありますが、この「ひみつ」とはどのようなことですか。本文中から最も適切な箇所を二十字以上二十五字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問二——部②「代名詞」と同じ用法のものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「よっちゃん」は私の代名詞だ。

イ「これ」「それ」「あれ」などは代名詞だ。

ウ「スマホ」はスマートフォンの代名詞だ。

エ「クラス委員」はクラスの代名詞だ。

オ「クレオパトラ」は美人の代名詞だ。

問三——部③「ほんとうに花粉がつかなくても、タネができるのか」という「ふしぎ」を説明するために、筆者はどのような実験を紹介していますか、本文中の言葉を使って四十字程度で答えなさい。

問四 空欄Ⅰ Ⅲ にあてはまる言葉を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア しかも イ なぜなら ウ たとえば エ ところが オ だから

問五 後の表について、次の(1)～(3)の問いに答えなさい。

- (1) 空欄「A」・「B」にあてはまる言葉を、それぞれ本文中から五字前後で抜き出し、書きなさい。なお、二箇所ある「A」には同じ言葉が入ります。
- (2) 空欄「C」にあてはまる言葉を考えて、五字以内で書きなさい。
- (3) 空欄「D」にあてはまる言葉を考えて、十字以内で書きなさい。

	セイヨウタンポポ	在来種
生殖の方法	「A」	「A」の能力はなく 「という性質がある
タネの個数	約二〇〇個	「C」
タネの発芽する能力	季節を問わず発芽する	「D」

問六 — 部④「日本古来の在来種を守るために、私たちは、土地の開発に慎重にならなければなりません。」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を使って九十字以内で説明しなさい。

問七 — 部a「うら」、b「たて」、c「てんこう」、d「く」のひらがなを漢字に直しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「やってみい」

父は積み上げられた箱の前でひとこと言う。

言葉の意味するものがすぐには理解できなかったが、数瞬を置いて出汁巻きのことが頭を過った。

「だしまき……?」

「そうじゃ」

「今?」

「やってみい。この卵、全部潰してもええからやってみい。出汁はとってある。まだオマエにや出汁は無理じゃからの」まな板の上にはボウルいっぱいの出汁が用意されていた。

思うに、その時旅館を継がせるための仕込みとしてのよい機会だといったような魂胆が父親にあったとは思えない。明治

生まれの一本気な彼の行動にはいつもうらがなかつた。彼は子供が自分の真似をしていることを知ってただ嬉しかっただけではないかと思う。本当に立派な出汁巻きの作り方をこいつに教えてやろう。ただそれだけのことであったと思う。敏感な子供はそんな父の気持ちを感じ取り、一人の人間同士として父と向かい合っている気分になった。そして自分のために貴重な卵を大量に取り寄せていたことに驚くとともに、そのとんでもない気前の良さのせいでいつも母親に小言を言われていた父の姿をあらためてそこに見ていた。たとえば父は、久留米の方の骨董屋で交渉してやつと手に入れた雄と雌一對の孔雀の掛け軸を、たまたま立ち寄った友人の娘の結婚式にお祝いものがないからとそのまま置いてくるような人だった。

その日、私は夕食の一時間の休みを省いて午後の四時から夜の十時までたっぷり五時間も出汁巻きを作り続けた。一箱分の卵は見る見る底をついた。

ふぐ刺し用の大皿には大量の出汁巻きの失敗作がうずたかく積み上げられ、流しには大量の卵の殻が散乱した。そして台所中に出汁巻きの甘い香りと焦げ臭い匂いが入り混じって充滿した。その間女中たちが冷やかし半分に台所をのぞき、将来は日本一の板前になる、などと冗談を言ったりした。しかしその間肝心の父は私のそばについて手取り足取り教えてくれたわけではない。

彼はやってみたい、と言ったまま、あつけなくその場から立ち去って行ったのである。(中略)はじめ私は肩すかしを食ったような気分になったが、しばらくして子供心に父が私に望んでいることが次第にわかりはじめた。彼は自分の足で歩け、と言っていただけのことだ。誰もそばにいないければひとつひとつ失敗することによって自分一人でその失敗を引き受け、その原因を必死で

考えなくてはならない。

レールだけはひく、あとは勝手にやれ、というそのような父の態度に、子供の私は自分の人格を認められたような気分にもなった。そしてメラメラとやる意欲が起こってきた。普段は飽きっぽく何事も続かない子供が五時間もぶっ続けで出汁巻きを巻くというのは考えられないことだった。その姿を見て母は子供の私に「X」を示したくらいだ。途中で台所に入ってきた母は「卵の殻、かたづけましょうかいの」と、父に言うような敬語を使った。私は「うるさいから向こう行っちゃって」とひとこと言い、母は「はいはい」と言って引き下がった。

結局、その日は失敗の連続でこれといった満足な出汁巻きは出来なかった。作り続けるうちに少しずつ進歩はするものの、またその分だけ自分自身の目と舌が肥え、どこまで行っても満足の域に至らなかったということもある。

父が家に帰ってきたのは夜の十時半をまわった頃だった。後かたづけを終えてのち、出汁巻きの失敗の山を前に呆然としていた時のことだった。父は私とその時間まで出汁巻きを作っていたことに驚いたらしい。通りすがりに台所に電灯が灯っているのを見て入口から顔をのぞかせた。そして状況を一目するなり「ほーっ、まだやつちよったんか」と言う。

そして出汁巻きの残骸を見るなり「ようけ(沢山)作ったのお。はっはっはっ」と大笑いした。私はそこでなんらかのアドバースがあるかと思っていたが、父はそのまま自分の部屋の方に向かった。そして離れぎわに何食わぬ顔で次のように言う。

「シンヤ、ひとつだけでええ、学校から帰ってきたら毎日ひとつだけ作るだけでええ」

……たったひとつ？

私はあつけにとられるとともに言葉の意味するところのものを汲み取りかねた。しかし翌日から、言われたとおりにたっ

たひとつだけの出汁巻きを作り始める。そしてやがて父の言葉の真意に気づく時が訪れることになる。

それまでの私には大量に用意された卵を前に、失敗すれば次を作ればよいという安直な気持ち^{【注2】}がどこかにあった。それが一日ひとつと限定されたことによつて一回きりの真剣勝負^{けんけん}とならざるをえなかった。日々、卵を前に身の引き締まるのを覚えた。思うにこれは料理というものを作る上において当たり前のことである。食べ物^{うたべ}を食べる前に「命を」いただきます^{【注3】おそ}という言葉があるように、それを調理する時にも人は何かの生物の命を奪っている。その命をいただくという畏れを持ちながら、それをおろそかにしないように真剣に食材に向かい合うというのは料理する者が持つべき基本の心構えというものだろう。私は父が大きな魚をさばいたあとにその頭^{かしら}に向かって軽くサツと手を合わせるその仕草の意味がわかったような気がした。

結局、合計何日間出汁巻きを作り続けたのかはつきりとは覚えていない。ただある日を境にひとつの変化が起きた。^C自分^{自分}の手の動きのぎこちなさがふつと消えたように思えたのだ。それが妙に客観的に見えるようになった。それまで私は頭で一生懸命に手をコントロールしようとしていた。しかしある時から手が自然に勝手に自分^Dで動き、頭がそれを追いついて見えているという、それまでとは逆の状態が訪れたのだ。

その手を見ながら、ある時、一瞬奇妙な思いが過った。^③まるで他人の手のように自分の手を見ながら、自分^Eが厨房のかたわらで見ていたあの父の手が一瞬それに重なり合ったのだ。

その時、後ろで声が出た。

「でけたか？」

振り向くとそこに父が立っていた。

私は無言でうなずく。

「見してみ」

私は父がいつも私にそうするように、出汁巻きを巻いた簾^{すだれ}を開き、包丁でさつと湯気の立つ出汁巻きの端^はを切り落とし、父に差し出す。

父はひよいとそれを口に放りこむ。

いつも自分^Fが作った出汁巻きを味見するやり方だ。

「ようでけちよる」

父は簾の上にある出汁巻きに目を落とし、ひとことそう言った。

「出汁巻きつちゅうもんはこげいでなきやいかん」

父はそんな言葉を残し台所を出て行った。いつもの素っ気ない態度だった。だが私は父が去ったあとの台所で小躍り^{わど}した。気分を抑えていた。

(藤原新也『名前のない花』一部改)

【注】 1 仕込み… 教えて身につけさせること。

2 安直な… 気軽なさま。深く考えないさま。

3 畏れ… 敬意を持ち、ありがたいと感じること。

問一 部 a 「魂胆」・ b 「一本気な」・ c 「肩すかしを食った」の意味として、最も適切なものをそれぞれア～エの中から選び、記号で答えなさい。

a 「魂胆」

ア 本心

イ 期待

ウ たくらみ

エ 愛情

b 「一本気な」

ア 純粹でまっすぐな性格の

イ 頑固でゆうずうがきかない性格の

ウ マイペースで周囲を気にしない性格の

エ 正義感が強く勇敢な性格の

c 「肩すかしを食った」

ア 無駄になった

イ 途方にくれた

ウ 見放された

エ 当てが外れた

問二 □で囲まれたA～Fの「自分」は、それぞれ何を指していますか。次のⅠ～Ⅲに分類して、記号で答えなさい。

Ⅰ 私（シンヤ）

Ⅱ 父

Ⅲ 私、父以外

問三 部①「あっけなくその場から立ち去って行った」とありますが、父はどのような思いで「立ち去って行った」と「私」は考えていますか、四十字以内で答えなさい。

問四 空欄「X」に入る言葉として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 驚きの表情

イ あきらめの念

ウ あきれた表情

エ 尊敬の念

問五 部②「毎日ひとつだけ作るだけでええ」と言った時の父の思いは、どのようなものだったと「私」は考えていますか。本文中の言葉を使って、八十字以内で具体的に説明しなさい。

問六 部③「まるで他人の手のように自分の手を見ながら」とありますが、そのような感覚を表した五字以内の言葉を本文中から抜き出し、書きなさい。

氏 名

問

11

8

問

11

45

[illegible]

40

I

1003

111

(1) A

[illegible][illegible]

90

a

1000

1000

らして

らして

二

a

1000

143

I

Source: *Author's calculations based on data from the 1996 Census of India.*

[illegible][illegible]

40

--	--

[illegible]

80
